



ブーリアン

ドット

フェイスイン

平木ノート

ブーリアン・ドット・フェイスイン

平木ノート

<目次>

ぜったいに空さないでください

水回りの女

長文読解

ぜったいに空さないでください

この時代、こどもたちの中で流行しているおもちゃがあった。

「ちょきんちょ」

と、ある女の子が言うと、彼女のふで箱がゆっくりと持ち上がる。もちろん誰が持ち上げたのでもなく。

「ちょきんちょ」

と、ある男の子が密かに声にする
と、隣にいた女の子のスカートの裾が少し持ち上がって、慌ててその子は両手で抑える。

彼らが手にするその形は、基本的に

「はさみ」で、持ち手はこどもの手に余るほど大きく、白と青の縞模様が施されている。はさみで言う刃の部分は、どこも鋭利になっていない

代わりに、交差する2枚の金属板には穴あき包丁のようにいくつも穴が開いている。

「ちょきんちょ」と声にすると同時に、ある物の真上で、まるで空まで繋がった透明な糸を根元から切るようにすると、その物体を宙に浮かばせることができる。「チョキン
ちょ」というそのおもちゃのネーミングと同じくこどもたちに広まったのは、宙に浮かす行為を指す動詞

「空(そら)す」。元々は「空に浮かばせる」の略で「空せる」だったが、若者の際限なき豊かな創造力によって、この呼び方になった。「話を逸らす」の「逸らす」と音を重ね

ることで、明日より「あさって」の方向に広がるわくわくが込められたのかもしれない。

「ちょきんちょ」

とある2年2組のりゅうせいくんがクラスで飼っている亀治郎を空した。亀次郎は、亀だ。

クラスみんなは、ゆっくりゆっくり浮かんで行く亀治郎を目で追った。

初めは慌てて手足をばたつかせていた亀治郎だったが、こどもたちが見上げる高さになった頃には要領をつかんで、気持よさそうに平泳ぎをはじめた。

その時、教室に戻ってきた「しいういん」のかなよちゃんが、宙を泳ぐ亀治郎を見て、「だれがやったの！」と叫んだ。みんなは黙ってりゅうせいくんを見た。

かなよちゃんはそのままりゅうせいくんのところに詰め寄って、おもむろにポケットに突っ込んだ手を取り出すと、一言だけ声にした。

「ちょきんちょ」

りゅうせいくんは、足が床から離れる感覚と同時に、「うわ、うわ」と裏返った声を上げた。亀治郎のように手足をばたつかせることも出来ず、壊れた扇風機のように首だけ左右めちゃくちゃに振りながら、首か

ら下を彫刻のように硬直させて、すぐに自分の身長の高さまで浮かび上がった。

クラスみんなは、それをまた見上げていた。

「あ、かなちゃん！」

かなよちゃんの一番のなかよしの、りさちゃんが大きな声を出した。みんながりゅうせいくんに気をとられているうちに、亀治郎は窓の外を泳いでいた。「うわあー」りさちゃんは少し興奮して鼻をふくらませていた。

何も言わずに教室を飛び出したかなよちゃんと、「わたしもいく！」と弾んだ声で出て行ったりりさちゃん

は、チャイムが鳴っても教室に戻ってこなかった。

大きな白地図を持って、チャイムと同時に教室に入った先生は、いつも通り授業を始めた。慌てる素振りもなかった。こどもたちよりもチョキンチョキンのことをちゃんと知っていたからだ。空した物が10分もしないうちに下りてくることは、もちろん分かっていた。

浮かんだまま、先生に叱ってさえもらえないりゅうせいくんは、はじめは少し騒いでいたが、すぐに自分がみじめになった。天井にはじめについたのは背中だったが、騒ぐのをやめてからは、お腹を天井に向けた。

みじめとか、はずかしいという気持ちを学んだ。それともう1つ、りゅうせいくんの目が天井に向いてからも、それどころか、この先何十年も忘れられない気持ちががりゅうせいくんに芽生えたことは、先生には知る由もなかった。

りゅうせいくんのおでこが天井を離れてしばらくして、やっと教室の床に足をつけようという時に、ちょうどかなよちゃんとりさちゃんと、かなよちゃんの腕におさまった亀治郎が帰ってきた。2人の靴下には小さな葉っぱがいくつも刺さっていた。

りゅうせいくんは着地と同時に、自分の体の重さを知った。もうとっく

に悪態をつく元気はなく、先生のところへしょんぼり進んで「ごめんなさい」とこびるように下唇をまるめた。

先生の口は何も言わなかったが、細くした右目がわざとらしく、何か質問を投げかけて、ほら、と際立った左目の視線の先、かなよちゃんの方へと背中を押した。

りゅうせいくんは、重たい足取りで、教室の入り口に立っているかなよちゃんに歩み寄った。近くでおそるおそる顔を上げてみると、かなよちゃんの透き通った眼は、りゅうせいくんをじっと睨みつけていた。慌ててうつむいたりりゅうせいくんの視

線の先に、かなよちゃんのひざこぞうがあった。そこにあった小さな擦り傷を見て、「ごめんなさい」とつぶやいた。

つんとそっぽを向いたかなよちゃんの眼に、一瞬、にっこり笑う先生の顔が映った。かなよちゃんは、その笑顔がなんだか面倒で、「いいよ」と一言、この気持ちを片付けることにした。そして、亀治郎を水槽に戻した。

次の休み時間には、亀治郎の水槽にノートの切れ端が貼られ、こう書かれていた。

「ぜったいに空さないでください」

りゅうせいくんがその張り紙を見る
たび、しょんぼりしたのは言うまで
もない。

20年後、龍生は宇宙飛行士になっ
た。

出発前のテレビ電話で、彼は妻に
「僕の名前が流れ星と書くんじゃない
くて本当によかったよ」なんて冗談
を言った。

「はいはい」

加奈代は、彼の妻として、電話の向
こうの彼に優しく微笑みかけた。好

きな女の子のスカート一つめくれずに、その女の子の大好きな亀を空してしまう、そんな臆病な彼らしい強がりだ、と思った。彼が宇宙飛行士を目指すきっかけを考えると、あの時、宙を泳いだ亀治郎も、なかなか気持ち良かったのかもしれない、なんて、ふと思う。

そんなことを知ってか知らずか、龍生は自分の乗るロケットを「亀治郎マーク5」と呼んでいた。

彼が帰ってくるまでの10年間、加奈代にはコールドスリープの選択もあったが、彼女はそれを選ばなかった。あの頃と変わらず純真な龍生の瞳には、この10年間に数えきれな

い輝きが映ると思う。私も彼と同じ時間をこの地球で生きよう。浦島太郎を待つような、それが彼女の選択だった。

カウントダウンが始まった。

世界のほんの1割にも満たない大勢が、固唾を飲んで、亀治郎マーク5を見守る。

そのロケットは1世紀前のものより半分以上軽量化されていた。大気圏突破に、あの頃、龍生や加奈代たちが夢中になった、あるおもちゃの技術が使われているためだった。

———3、

・・・2、

・・・1。

精一杯の願いを込めて、加奈代は一つ呟いて、再び龍生を宙へと見送った。

「ちょきんちょ」

水回りの女

ソファで彼が、Yシャツのまま、寝息を立てる午前2時。

台所には、蛍光灯のスポットライトに照らされる、1人の女の姿があった。

というか、私だった。

彼との添い寝は、クマのぬいぐるみに任せて、その女は、というか私は、洗い物の片付いた台所で煙草を吸っていた。

はじめに言っておく。

このお話は決して、水回りに特別な思いを抱く女、というか私の、松居一代的な話ではない。ましてや、松居一代包丁や松居棒的な話などで

は、断じてない。

何も考えずに煙草を吹かしている視線が無意識に、流しに散らばった水たちの残骸を捉えていた。

そして次第に、それまで景色に溶け込んでいた排水溝に溜まった生ゴミたちが主張してくる。女という生き物は、苛立ちに比例して、目に飛び込む情報の数が増えていくらしい。

「あ～、めんどくさ」

シンクを綺麗に拭こうだの、排水溝のザルに溜まったゴミを捨ててたわしで磨こうだの、やりもしないのに、とてもめんどくさい。どうせやるなら、私はこのために生きてい

る！ぐらいの喜び目一杯に変換して、という人の気持ちも分からなくなるほどだ。

私も女に生まれてきたがために、ここで水回りを綺麗にしておけば、彼に絶妙なボディブローを1発2発入れたことになるのでは、とか考えてしまう。そして、この不純な動機で、本音の方は、ますますめんどくさい。

「私の趣味は、水回りを綺麗にすることです！」

なんて、少し照れ屋な女の子が、周りの空気も読めずに一生懸命自己紹介したら、その合コンはその子の1人勝ちだろう。女の私も、その子と

なら一線超えてみたい。一戦交えて、いじめ倒してもみたい。はあ～、なんてマイナスイオン溢れるのだろう、その子。

実家に住んでいるんだろうに、毎日お母さんの料理を手伝うんだわ、その子。

週末も、まっ昼間っからスポンジケーキを焼いているんだわ。そして、夜も綺麗にするんだろうに、数時間後には夕飯の支度が始まるんだろうに、昼は昼で、水回りを綺麗に拭いているんだわ。

「そんなのいいからさ、こっちおいでよ」

なんて、彼の家で、下心丸出し男

の、その丸出し加減も微塵も察知しないで、「ちょっと待ってて」なんて言いながら、どうでもいいドラマの話とかを熱心に彼に話しながら、その男の興味なさそうな顔もひっくり返しちゃうくらい楽しそうに、手を休めないのよ、その子。あ～、その子のエプロンになりたい。

「というか、その子というのは、実は私のことだった」

一つだけ願いが叶うなら、今の嘘を真実にしてもらいましょう。

あ～私はダメ。乾いてる。こうやって、彼が眠っては、乾いた葉っぱに火をつけて、その煙を吐き出しているだけ。

海、という文字は、あれね。水回り
にいる女の母性を表しているんだ
わ、きっと。

こうして、水回りに立っているだけ
でも、こんな私にも何か、寄せては
返していく。

はあ～、深呼吸。

右回り、左回り、時計回り、水回
り。

きっとそう。

水も滴る、とはよく言ったもんだ
わ。

キャベツを刻んでいる姿より、鍋を
ぐるぐるかき回している姿より、洗
い物を流している女の姿が一番素敵
に思うもの。

さ、シャワー浴びよ。

長文読解

今から20年以上前、人類は、スマートフォンやノートPCから進化した「MEGA.net(世界共通の名称、メガネ)」というゴーグル型のライフツールを介して、目の前の相手の感情を瞬時に読み取る能力を獲得した。それに伴って、言語は極端に短縮され、10年と経たないうちにどこかの科学者が人の口のわずかな退化の兆候を指摘した。

ちなみに「今」とは、2056年12月31日。この頃すでに、メガネはアフリカ大陸のほとんどの人間にも行き渡っていた。

ところが、その今、まもなくまた1つ西暦がカウントアップされようと

いうこの時、このツール誕生の地、真っ先にこのメガネが広く普及したある「みいはあ島国」の、そのまた一部の若者が異議を唱えようとしている。某W大学の某サークルホームページにあったのは、その予告日時、何かのアドレス、そして、「新本格日本語」というゴシック体。極彩色の看板を掲げた彼らは、その島国の時刻で深夜12時をまわったと同時に、以下のように宣言した。

「人の感情が、分かる、などということがあってたまるでしょうか。今では、ロボットも同じ技術を使って人の感情を認識しているのです。そのロボットは、赤や青、あるいは、

今日の最低、最高気温と同じベクトルで、我々の感情を、測っている。この意味がおわかりですか？ 人間が、メガネを介して、人の感情を、測る。これはまさしく人類史上最大最悪の退化であります！ この時流に対し、我々は、強引なまでに体現していこう！ PであってかつPでない、という感情の存在を！」

メガネではなく、一世代前のパソコンというツールを使って、LIVEストリームで配信されたこの動画の最後に、サークルのリーダーはこう付け加えた。

「———昨日までの世界、昨日までの自分、溜まり詰まった欲望も夢

も、地球が誕生してからまさに今この瞬間までの喜びや悲しみも、全ては砂浜に書いた文字」

これが彼のたった一言、「おやすみなさい」だった。

このサークルの出現、最後に放たれた一言は、一部の、主に読書好きな、さらに言えば、高級品となった紙媒体による読書を趣味にする物好きな、そう多くはない若者だけをピンポイントに対象として、熱く震撼させた。

各地の比較的インテリな、あるいは頭でっかちな大学の変わり者たちの間で、新本格日本語サークルは穏やかに、微笑ましく広まって行ったの

だった。

そして、ここは、遅れること数ヶ月、やっとこさそのムーブメントに乗っかろうという、片田舎の某私立大学新本格日本語サークルの部室である。

「天照大御神の庭には二羽ニワトリがいた！」

「おお、苦学生ヘリオスがオケアノスという名のカブにまたがり、朝日新聞を窓から突き破るこの喜び！」部室の扉を開きながら声を掛けたのが副部長の安田。返事をした部長の戸田は、とりあえず新古今和歌集をめくっていた。この大学で「新本格

日本語」の旗印の下に集ったサークル部員は現在2名。この大学にはまだムーブメントの波は来ていなかった。しかし、2人の新本格「おはよう」は、この片田舎にもムーブメントの夜明けが近付いていると信じてやまない、そんな情熱に満ち満ちていた。

1年が経ち、このサークルは新入生7人を含め11名になった。2人からこのサークルを始めた戸田と安田にとっては、この人数も小さなムーブメントであったし、間違いなくその中心に2人はいた。

その日、戸田が5号館の階段を上
がっていると、

「あ、新本格部長」

最近サークルに入った1年の越川が
声をかけた。この頃、戸田は、自ら
の役職に「新本格」をつけるに至っ
た。

「ああ、君は、越川のようにもあ
り、天女の羽衣に手を延ばすインド
ゴムの木のようにもあるが、ここは
一つ越川」

「ありがたや～ 吾輩は～ 長靴を履
いた猫ではないのにや～」

越川は、実にさらりとこんな返事を
した。

その一瞬、戸田の顔が凍る。ここ

1ヶ月ほど、新本格部長になる少し前から、この顔を見せることが多くなった。

「そうかにゃ～ それはそれはさわやか3組の窓際族のことよ。新本格部長も、4度目の仏の顔を見れた」経験でカバーすることは出来る。しかし、ムーブメントの少し後からやってきたもう一つの波、ニューウェーブはすぐそこまで迫っていた。彼らはしばしば「響き」重視の言葉選びをするのだ。

戸田にとってその世界観は、まさに混沌、新本格風に言えば「2058年宇宙の旅 八面楚歌！ヒモ宇宙編」であった。

戸田はそのまま浮かない顔を引きずりながら、ある教室の前で立ち止まる。「新本格部室」という札の掛かった引き戸を開くと、たまたまそこには安田だけしかいなかった。

「やあ、ズボンの後ろポケットと文庫本、あるいは、新本格部室と安田・副部長・実」

安田実(みのる)は、最近、自分の役職をミドルネームとしている。これにはサークル内で、いくら新本格と言っても日本語の観点から考えてミドルネームはいかがなものか、と、小さなサークル内で小さな波紋を呼び、議論となった。これに対し、安田本人は、「暗いと不平を言うより

も、進んで明かりを見つけませう！」と自信満々に言い放ったが、これではまずいと戸田が「二つ名という考え方もある」とフォローしたのだ。これがおさらまずかった。戸田も言ってからすぐに気づいたのだが、新本格部長の風上にもおけない失態は、すでにその場に横たわっていた。後にも先にも、戸田が部員の前で「まともな日本語」を喋ってしまったのは、この時だけだった。当の安田ミドルネーム事件はなんとか収まったものの、それ以降、サークル内には微妙な空気が流れていた。

「新本格部長。おはよう、こんばんは、おやすみなさい、さて正解

は？」と、安田が、新本格なぞなぞで挨拶をした。ちなみに、答えは、選択肢にはないというのがお決まりのパターンで、この場合「こんにちは」なのだが、相手は正解をわざわざ言わないのもまたお決まりとなっていた。

「ところてんー」戸田が話を切り出す。「天竺へはどう行ったら良いでしょうか、と聞かれた私は犬のおまわりさんだよ」

「まさしくんー」安田は同意する。「はい、元気です。武蔵丸ノ海くん。はい、先場所の取組で痛めた首が縦にしか振れません」

戸田はここでもわずかに顔を強ばら

せた。明らかに毛色の違う「武蔵丸ノ海」というフレーズには、まさに今、彼の抱える問題が内包されていた。また響きというやつか、と、戸田は小さなため息をついた。

戸田と安田は学年が1つ違っていた。安田は戸田の1年後にこの大学に入ってきたのだ。安田が入学してすぐに選んだサークル、漫画研究会に、戸田は先輩として1年前から所属していた。すぐに2人は打ち解けた。戸田にとって安田の、安田にとって戸田の言うことは、他の漫研部員の言うことの10倍も20倍も刺激的に思えた。そして、あの、全国に響いた「新本格日本語」の産声

は、2人が2人とも、両耳の鼓膜の奥の何かを、最大限震わせるような事件だった。それからしばらくは「これからは漫画も新本格の時代だ」と張り切っていた2人だったが、新本格にふさわしい絵心は、2人とも持ち合わせていなかった。そうして、ムーブメントに少し遅れること数ヶ月、このサークルを始めたのが1年前。そこから1人、また1人と部員が増えたのも安田の尽力の賜物だった。勧誘から諸連絡、副部長という中間管理職の業務において安田は、人見知りな戸田をこれでもかと支えた。この春は新本格日本語サークルにとっても、ささやかな書

き入れ時となり、部員構成の過半数が新入部員となった。サークルの今後を占う上で、最も重要と思われたここ1、2ヶ月をなんとか乗り越えたのも、安田が潤滑油のように、戸田と新入生の間に入ってくれたおかげだった。ミドルネームの一件はあったものの、部員の安田に対する信頼はいまだ厚い。実質、戸田のそれを上回っているだろう。そんなことは戸田も心から祝福できた。サークルを運営していく上でも確実にプラスに働くだらう、と思うのは、新本格部長として当然のことだ。戸田の顔を強ばらせるのは、くだらない嫉妬などではもちろんなかった。

しかし——、安田は自分より1つ若い。

安田にはどうすることもできない、このたった1つの事実だけが、戸田を悩ませていた。新入生のぶっ飛んだ感性が、唯一絶対に信頼すべき副部長の中にも、確かに見て取れてしまう。そんな時、戸田は、新本格部長としての自分を忘れ、ただただ新本格街道をひた走る、1人の新本格日本人としての自分を強く意識させられる。

「武蔵丸ノ海にも、副武蔵丸ノ海にも、もちろんメガネなんかに
も・・・、この霧雨を雨としては捉えられまい」

戸田の中で、何かはじけかけていた。

安田が短く唾を飲んで、一瞬の間を置いて答える。

「副武蔵丸ノ海とメガネを同じかぎかっこで書くのは、一体どこのかぎかっこ習いたての鍵っ子でしょうか」いつもは脳天気な安田の顔も、この時は、新本格と付けたくなるほど難解だった。

その安田の難解さ、その存在自体にすら、戸田はそっぽを向いていた。新本格日本語というものは、話す方も聞く方も相当な神経を使う。お互いの精神状態によっては、ほとんど何も伝わらない。相手の言っている

ことを理解したい。相手に伝えたい。コミュニケーションの最も根幹にあるべき衝動が、常に問われるのだ。

「副武蔵丸ノ海もメガネも、人間がつくったという点では、中佐ない、少佐ない、さて正解は？」

今の戸田は、ただのいじわるで、みじめな人間だ。

「大佐でもなければ、准将でも・・・、将校ですらない・・・」
先に安田の中で何かはじけた音にすら、戸田は気づかずに、「なんだって？」と言わんばかりに左の口角を釣り上げた。

「部長ですよ！」

安田は、目の前の男の役職を叫んだ。

戸田はそこで、やっと、はっとした。顔を上げると同時に、視界に飛び込んだ安田の瞳は、溢れんばかりの感情で濡れていた。自分の情けなさや、それすら瞬時に人間という生き物のせいにしてしようとする――、やっぱり情けなさや、これから雪崩のように押し寄せるであろう熱い動揺を前に、戸田は、ただ立ち尽くした。

さらに大きな声で安田が畳み掛ける。

「僕がついて行くと決めたのは・・・部長だけです！」

安田は、まさしく副部長の鑑(かがみ)だった。新本格副部長の前に、彼は、ただの副部長だった。彼の、その力強く、そして何よりまともに短いその一言は、戸田たちが思い描いていた「新本格」とはほど遠かったが、その一言に当てられ、自分の惨めさに酔いしれるのもふっ飛んで、不思議と笑えてくるこの感情は、まさしく「新本格」にふさわしい、と戸田は思った。

目の前のステレオタイプな副部長にすら新本格を見出した瞬間、戸田は、この思考の階段の、ずっとずっと先に小さな光があることに気づいた。

意識だけが乱暴なスピードで、その階段を一気に駆け上がり、締まりかけの扉をすり抜け、どこかの屋上へと飛び出す。

誰かが。

何かが。

いた。

と思った。

何もなかった。

戸田は、それでも頷いた。

あった。

という確信があった。

全ては瞬間だった。その瞬間の戸田だけが答えに手をかけて、爪にひっかけたその欠片ごと、ムーンウォークのように滑らかに姿を消してし

まった。

今の戸田は、なんとなく分かったような気がするだけの抜け殻だ。

たくさんの思いを押し込めて、戸田は、安田に、2度目となる大失態を投げかけた。

「ありがとう」

小説&アプリ作家「平木ノート」

twitter

(最新情報、感想のリプライなど)

@HirakiNote

HomePage

(あとがき、今後のリリースなど)

「スクランブル・デパート」

→サイト名をGoogle検索すると、
一番上に出ます。

→<http://sites.google.com/site/scrambledepart/>

小説短編集「ブーリアン・ドット・フェイスィン」(スマートフォン用)

<http://p.booklog.jp/book/30101>

著者：平木ノート

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hirakinote/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30101>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30101>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.